

国宝

四〇〇年余の
風雪に耐えて：



天守築造

城に北条氏直を下し天下を統一すると、徳川家康を関東に移封しました。この時松本城の小笠原氏が家康に従つて下総へ移ると、秀吉は石川数正を松本城に封じました。数正・康長父子は城下町の経営に力を尽くし、康長の代には天守三棟（天守・乾小天守・渡櫓）はじめ、御殿・太鼓門・黒門・櫓・堀などを造り、本丸・二の丸を固め、また城下町の整備をすすめ、近世城郭としての松本城の基礎を固めました。天守の築造年代は、康長による文禄三年から三年（一五九三～四）と考えられています。

創始

戦うための黒い堅固な天守と、平和な時代になつて造られた優雅な辰巳附櫓・月見櫓。数々の優れた築城技術を今に伝えています。

六階に登る階段（天守五階）

御座の間（天守四階）
書院造り風のこの部屋は、いざというときには、城主がいるところ（御座所）になりました。天井が高く、四方から光が入りります。注
にたけはおどり場が設けられ、階段が緩やかになっています。

窓がない暗い部屋 — (天守三階)

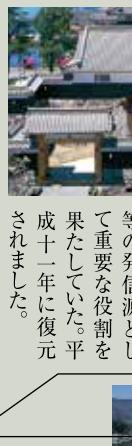
からないので、最も安い
全なため、戦のとき
武士が集まるところ
でした。光は南側の
木連格子からわずかに
に入るだけ暗く、敵
には秘密の階でした。

明るい階です。堅格子窓(武者窓)が東・西・南の三方にあります。四部屋に分けられていて、武士たちがつめている武者溜だつたと

現存する日本最古の五重天守にふさわしい風格ある環境景観。歴史的・文化的、さらに美的価値も見逃せません。



二の丸御殿跡
本丸御殿焼失後、藩の政府が二の丸御殿に移され、幕末まで中枢機関とされた。昭和五十四年から六年間かけて発掘され、史跡公園として整備され、平面復元されました。



太鼓門 太鼓門構形は、文禄四年（一五九五）頃築かれ、門台北石垣上に太鼓楼が置かれ、時の合図登城の合図、火急の合図等の発信源として重要な役割を果たしていた。平成十一年に復元されました。



黒門 本丸に入る正面で、櫓門と并形からなり、木丸防衛の要である。一の門(櫓門)は昭和三十五五年(一九六〇)に復興し、「二の門」(御昇殿門)は平成二年(一九九〇)に復元された。



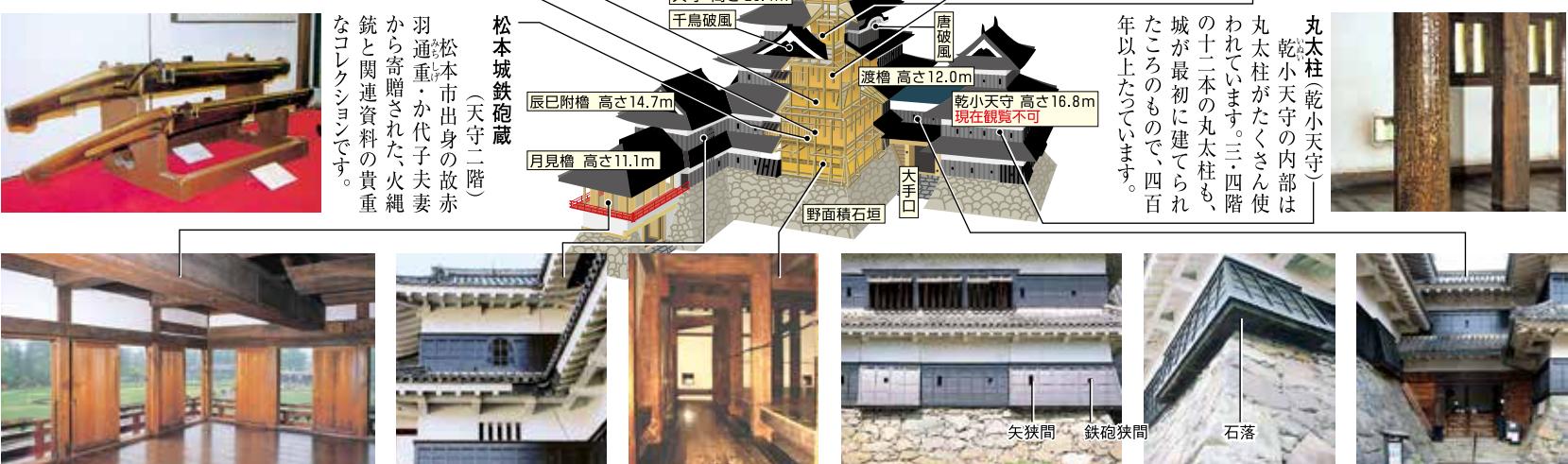
A black and white portrait of Wang Kang, a Chinese philosopher, looking slightly to the right.



天守閣保存に尽力した功労者



二の丸御殿跡 本丸御殿焼失後、藩の政事が二の丸御殿に移され、幕末まで中板機関とされた。昭和五十四年から六年間かけて発掘され、史跡公園として整備され、平面復元されました。



渡櫓(天守への入口) 天守と乾小天守をつないでいるのが渡櫓です。二階には、天守の瓦や、鍛冶屋が一本作つた和釘などが展示されています。
石落と狭間 天守閣では、戦国時代の主力武器であつた鉄砲戦への様々な備えを見ることができます。厚い壁には矢狭間・鉄砲狭間があわせて二五ヶ所あり、天守・乾小天守、渡櫓の階には石落が設けられています。石落は石垣を登つてくる敵を防ぐ工夫で、狭間と同じように鉄砲を使っての攻撃も可能な武備でした。
たくさんの柱 (天守一階) 建材はツガ・桧、松などが使われています。この階は、食料や武器・弾薬の倉庫であつたと考えられています。
泰平の世になつてから増築された二棟 「辰巳附櫓」 天守の南東(辰巳)にあり、隣の月見櫓と一緒に寛永年代に造られた建物です。一階は武者窓、二階は花頭窓。花頭窓の内側には引分板戸があり、雨水を流す工夫がなされています。
「月見櫓」 月見をするための櫓で、北・東・南の舞良戸を外すと、三方がふきぬきになります。周りにめぐらされた朱塗りの回縁や船底形をした天井は、天守・渡櫓・乾小天守には見られない開放的な造りです。